

三帝（継体・天智・聖武）と百済

国指定特別史跡「百済寺跡」がこの枚方市にありまして、そのことをご理解頂きたいというのが講演の目的であります。どうぞお気軽にお聞きください。講演資料を用意しておりますがのご覧になりながらお聞き頂きたいと思いますが、必ずしもこの通りには運ばないかも知れませんので予めご了承をお願いしておきます。

さて、今日のお話しのタイトルは「三帝と百済」ということになっておりますが、何故三帝かと言いますと、百済寺が建設されることとなった事情を時代を遡って考えますと、百済との関係が強化された継体天皇の時代、百済寺を建てた百済王氏が日本に定着する天智天皇の時代、そしてその百済王氏が枚方の中宮にやってくる聖武天皇時代のそれぞれの出来事が、遠因、近因、直接の原因と考えることができます。と言うことで、三帝と百済、或いは百済王との関わりについてお話しをして参りたいと思います。

1. 継体天皇と百済情勢

(1) 三国時代の朝鮮

百済とは朝鮮半島に4世紀前半から7世紀後半に掛けて存在した国であります。この頃は高句麗、新羅、百済という3つの国が鼎立して勢力を競い合っていました。従ってこの時代を三国時代と言っております。中国にも三国時代がありまして魏・呉・蜀の三国が争った時代でしたが、これは大体西暦220年から280年頃の60年くらいの間のことですから、半島の三国時代の始まりよりは100年以上も前のことであり、また期間もずっと短いのです。この半島の三国時代はわが国即ち倭国との関係が大変深かった時代でありまして、倭国も半島において植民地とは言えないまでもかなり大きな権益を持っていたようです。そして3国と倭を加えた4国が互いに抗争した時代だったと言っております。

百済と倭国とは、百済が建国された直後くらいから関係が始まったようであります。百済を建国しました肖古王の時、斯麻宿弥（しまのすくね）が使者として伽耶の卓淳国を通じて百済に送られています。その後三国は倭国を交えて四つ巴の抗争を繰り返しますが、475年には百済は高句麗に攻められて王都漢城は陥落し、時の蓋鹵王は戦死し文周王が都を熊津（公州）に移します。その熊津にあって、百済再興の王と言われた武寧王が501年に即位し、高句麗に取られてしまった北の地域の代わりに、南の方の馬韓だとか伽耶とかに勢力を拡大して行きます。当然新羅と対立することになりますし、任那日本府と称して伽耶地域に権益を持っていた倭国とも問題が生じることとなります。こんな時代にわが国では継体天皇が登場するのでして、507年に枚方の樟葉宮で即位されます。

(2) 継体天皇時代の百済関係

① 男大迹王

継体天皇は、前王朝が武烈天皇に子が無かったために途絶えてしまいましたので、大和の豪族たちが協議して越前の豪族であった男大迹王（おおどのおう）を迎え入れたものであります。天皇家が万世一系ではなく継体天皇から交替しているのだというのはこうした事情によるのですが、辻褄を合わせるために男大迹王は応神天皇5世の孫ということにしました。ちゃんと系図が来ていますが、5世の孫というのには実は理由がありまして、日本書紀が書かれた時代には5代目までを皇族として認めることになっていたのであります。5世の孫と言いますと恐らく何処の誰だか分からないというのが通常感覚でしょう。要するに何処の誰だか分からないが皇族には違いないということで

でっち上げたと考えるのがよさそうです。

しかし男大迹王は、招請のために出向いた大伴金村が、「居ながらにして大王の風格があった」と認めた程の人格者だったようです。大王というのは、当時まだ天皇という呼び方はありませんで、大王と称していたのです。ですから継体大王というのが正しいと思いますが、天皇と言った方が理解しやすいと思いますので、これからも天皇ということにさせていただきます。

② 河内馬飼首荒籠

ところで、金村が直接招請に赴きましても男大迹王はなかなか承知しません。その時、仲を取り持ったのが河内馬飼首荒籠（かわちうまかいのおびとあらこ）でした。馬を飼っている集団のボスの荒籠というわけです。荒籠というのは安羅の人という意味で、安羅は伽耶地域にあった国の一つでした。任那日本府もこの安羅にあったのではないかと考えられています。当時馬を飼うというは主として運送業をやるということですし戦時には大きな戦力になります。男大迹王と金村の間を取り持ったということは、それなりの実力と実績があったということができます。荒籠は男大迹王と運送業を通して深い信頼関係が出来ていたのでしょう。越前の国では日本海を挟んで半島の諸国とは普段から交易があり、特に伽耶の南岸にある南伽羅（ありひしのから）や安羅とはかなり密な関係にあったでしょう。そんな関係の中で荒籠は特に重要な役割を果たしていたように思われます。

荒籠の活動の根拠地が交野原だったのではないのでしょうか。天皇になることを承諾した男大迹王でしたが、直ちに大和入りするにはまだまだ懸念がありました。大和の豪族たちの中には平群氏など男大迹王擁立に反対する勢力もあったからです。樟葉は荒籠の勢力が及ぶ地ですし、万一の場合には越前と通じやすい場所と言えます。このように考えますと継体天皇の樟葉宮での即位は必然的な出来事でした。

③ 任那割譲

継体天皇は、即位後4年目の511年に都を筒城宮に移します。今の精華町の辺りですね。大和に一步前進であると同時に、巨椋池という大きな池を通して山科へ、琵琶湖を通して越前へと繋がっていて、継体にとっては都合のよい地だったのでしょう。

しかし、その直後の512年に大伴金村が任那の上哆唎・下哆唎・沙陀・牟婁4県を百済に割譲するという事件が起こります。この4県のあるところは馬韓と言われたところでして、倭国から渡来した人が多く住んでいました。そして513年には蟾津江流域の己紋・帯沙2郡も百済に割譲します。ここは伽耶の内陸部にある諸国にとって重要な交通路ですから、伽耶からの抵抗も相当なものだったようです。しかし割譲といっても実は百済がこの地域に攻め入って、倭の権益をも放棄させたということだと思います。この時の百済の王が先にお話ししました武寧王です。武寧王の南下拡大政策が、日本書紀には金村の割譲という表現になっているのです。

④ 乙訓宮遷都

このような半島情勢の中で継体は、518年に都を乙訓宮に移します。大和からは一步後退したように見えますが、ここは裏日本へ通じる交通の要衝ですし、水路としては瀬戸内海から九州、半島へと向かっていくのに大変便利な場所です。大和と半島に睨みを利かせ、裏日本を背後に構えるという継体天皇の思慮深い遷都だったように思います。ここから百済や伽耶などに対するいろいろな政策と同時に、大和の豪族に対する方策が行われて行ったでしょう。継体天皇が大和の磐余玉穂宮に入るのは526年のことで、乙訓宮には8年間おられたこととなります。そして大和入りするとすぐに、近江臣毛野を総帥として6万という大軍を半島に送ります。その軍が新羅と結んだ筑紫国造磐井によって阻止されると、物部麁鹿火を送って鎮圧させます。大和に移っての継体天皇のこの俊敏な行動は、乙訓宮においての準備なしには考えることが出来ません。

⑤ 磐井の乱

物部麁鹿火に鎮圧された筑紫国造磐井の墓が福岡県八女市にありまして、岩戸山古墳と呼ばれています。このことは筑後国風土記に書かれていて、古墳の埋葬者が記録にはっきりと書かれているのは大変珍しいことです。国造というのは律令制による地方長官で府県知事のようなものですが、通常はその地方の豪族がそのまま任命されておりまして、磐井の力は大変なものでして、その古墳の出土品から見て中国との交流も独自に行っていたようです。大和政権も一目置く存在だったでしょう。その磐井が大伴金村の百済に対する任那譲渡によって半島での利権を大きく損なったであろうことも想像されます。こんなことが磐井と新羅が結んだ背景にあったような気がします。

という次第で、磐井は近江臣毛野の半島への進軍を阻止したのですが、継体はこの磐井の行動に対して俊敏な処置を取ります。しかし、磐井の抵抗力は大きく鎮圧には1年半を要してしまいます。

⑥ 近江臣毛野

こうして毛野は529年になってやっと任那に進軍するのですが、毛野のやり方の拙さもあって、伽耶問題に関する毛野の交渉は失敗に終わります。毛野は失意のうちに帰国するのですが、途中対馬で死んでしまいます。

その遺骸を迎えるために枚方まで来た毛野の妻の詠んだ次のような歌があります。

ひらかたゆ 笛吹きをのぼる 近江のや 毛野の稚子い 笛吹きをのぼる

「ひらかた」という言葉の初出です。この会場の隅のところにもこの歌を刻んだ碑が立てられています。では、何故毛野の妻が枚方に来たのかということですが、近江臣毛野の従者に河内馬飼首御狩という人がいます。荒籠と関係があると思われるその御狩が世話をしたのではないのでしょうか。枚方市民病院のすぐ傍に御狩野神社というのがあります。狩猟場であった交野原は天皇や貴族の御狩野ですから禁野なのですが、そこにある神社だから御狩野神社ではないかと言われています。しかし私はこの「御狩の神社」ではないかと思っています。狩野の「野」は、天の川が天野川となったのと同じです。神社の近くに宅地開発によって潰されてしまった白雉塚古墳がありましたが、馬具などの副葬品が出土しています。御狩にふさわしいもので、私はこの白雉塚古墳は御狩の墓であると密かに想像しています。とにかく御狩が枚方で毛野の遺骸をお守りしていたので、そこに毛野の妻がやってきたのです。

2. 天智天皇と百済の滅亡

(1) 半島での動き

継体天皇は531年に崩御されました。ということになっていますが、その子である安閑天皇・宣化天皇や欽明天皇の即位の関係などから見て、いろいろとややこしい問題があったのではないかとこの見方があって、それに伴って527年説、534年説などがあります。いずれにしても、天皇の死後に伽耶・任那を挟んでの百済と新羅の対立は厳しくなり、倭と百済は伽耶諸国と共に新羅と対策を協議しています。百済の聖明王は538年に都を熊津から泗泚(しび)に移すと共に、わが国との交流を深めるために仏教を伝えております。552年という説もありますが、これが戦時中に「仏さんが1212とやってきた」と年号を覚えたあれですね。日本の年号は西暦より660年古いように設定されていましたから、 $552+660=1212$ というわけです。ところが554年には百済が新羅に破れて聖明王は戦死し、伽耶の一国である安羅は新羅の従属下に入っています。562年には新羅は更に進攻して伽耶での最大の国であった高霊伽耶を投降させます。こうして伽耶は滅亡状態に陥るのです。わが国の任那日本府もここにおいて消滅してしまいます。

余談ですが、この高霊伽耶こそが日本神話に出てくる高天原(たかまがはら)であると言われます。

高霊はタカマと読むことが出来ます。古事記や日本書紀その他の文献を丁寧に読んでみると、天照大神は高霊伽耶にいたと推測できるというのです。果たしてどうでしょうか。

さて、欽明天皇やその後の天皇は任那の復興に意欲を燃やしまして、推古天皇時代の600年には倭国が新羅を攻めて、一時伽耶の一部を回復するということもありあました。しかし新羅は倭との関係を完全に断絶しようとしたわけではなくて、押しやり引いたりとして上手に立ち回っていたようです。そして、いつの間にか新羅が伽耶の殆どを支配することになってしまいました。

(2) 白村江の戦い

このような新羅の支配が強い状態を打開しようとして活躍したのが百済の義慈王でした。641年に即位していますが、その翌年には新羅の西部、即ち伽耶に進出してこれを奪取し、更に新羅の深くまで進攻します。そして、これを倭国に認めさせると共に同盟を強化するため人質として王子の豊璋と禅広をわが国に送って来ました。しかし、朝鮮半島に勢力を伸ばしたい中国の唐が突如新羅と組んで百済を攻めたものですから、態勢の整わない百済はわずか10日間の戦いで破れ、遂に滅亡してしまいます。660年のことです。

百済滅亡直後から、王族の鬼室福信らが百済復興軍を組織し、倭国の人質になっていた王子豊璋を擁立して、倭と高句麗の支援を受けて新羅・唐の連合軍と戦いました。しかし、福信と豊璋の間に戦略上の対立があって、豊璋が福信を殺害してしまうという事件が起こり、復興軍が戦意を喪失した上に、白村江の戦いで倭の水軍が唐の水軍の前に壊滅し、復興計画は失敗に終わってしまいます。663年、こうして百済は完全に消滅してしまいました。

この復興軍に力を貸したのは女帝の斉明天皇と摂政の中大兄皇子でした。わが国としても新羅によって半島での利権を奪われたわけですから、百済の復興支援は当然のことだったでしょう。王子豊璋に大織冠という最高の冠位を与えて送り出し、天皇自ら九州に赴くという程の力の入れようでしたが、天皇は九州で病没されてしまいます。中大兄皇子はこの復興計画の失敗によって、唐がわが国にも進攻してくるのではないかと大変恐れて、対馬をはじめ各地に山城や水城を築きます。そして大和に帰らずに大津に都を造営します。琵琶湖周航の歌に出てくるあの志賀の都です。

百済に帰った豊璋の弟である禅広は、664年に天智天皇によって摂津国難波に土地を与えられて亡命者と一緒に街をつくりました。その他亡命者たちは滋賀県だとか長野県の方に土地を与えられて部落をつくります。禅広は690年に持統天皇から「百済王(くだらのこにきし)」という名を与えられて、百済からの渡来人や亡命者の中でリーダーとしての地位を確認されます。こうして、その後の百済王家の活躍の基礎が作られることになります。

3. 聖武天皇と百済人

(1) 聖武天皇の時代

① 奈良の都

来年2010年は平城京が出来た710年から丁度1300年になります。鹿の角を生やした仏さんのマスコット人形が出来て話題になっています。奈良の都というとすぐに聖武天皇や東大寺大仏を思い出して、聖武天皇が平城京を始められたような錯覚を起こしますが、実はそうではありません。元明天皇という女帝が奈良へ遷都されています。元明は文武天皇のお母さんで、聖武天皇から見れば祖母に当たりますが、文武が早世しその子首皇子(おびとおうじ)がまだ幼なかったために祖母が皇位を継ぎました。そして重臣たちの意見を取り入れて遷都を行ったのであります。それが710年のことです。次に文武の姉で聖武の伯母に当たる元正天皇が即位し、その次に首皇子が継いで聖武天皇となりました。聖武天皇の即位したのは724年のことです。それから25年間皇位にありましたから、平城京74年の3分の1を占めます。そして奈良時代の話題を独占する事績を

残しておられますので、やはり奈良時代＝聖武天皇時代と言ってよいのかも知れません。

② 聖武天皇の彷徨

病弱の文武天皇を父とし、藤原不比等の娘でノイローゼのために監禁されていたという宮子を母とする聖武天皇はやはり生まれつき病弱であったでしょう。また皇后には同じく不比等の娘である光明子を押し付けられて、全く不比等の管理下にあったと云ってよい状態であったのですから、聖武天皇が常に少々ノイローゼ気味であったとしても不思議ではありません。もっとも違った見方もありまして、その事績を見ると自分の意思をかなり強く主張しておられますし、また実行もしておられますから、決して弱々しい天皇ではなくてむしろ強い天皇であったというのです。しかし、強いように振舞う行動は弱さの裏返しであることもよくありますから、5年間の彷徨の旅を考えますと決して強い天皇ではなかったようです。

729年に長屋王の変という事件が起こります。これは、天皇の血筋でない光明子を皇后に立てたこと、また同じく天皇の母宮子に皇太夫人の尊称を贈ったことなど、藤原氏の専横を咎め立てたことが起因となって、天皇への謀反の罪を着せられた長屋王が自刃するという事件です。高市皇子の子で天武天皇の孫という長屋王でさえも、藤原氏によって陥れられたのでした。こんな藤原氏の呪縛から解放されたいと思っておられる天皇に、追い討ちを掛けるように全国的な大飢饉が発生します。同時に天然痘が大流行して頼りにしている重臣たちも次々に死んでしまいます。こうしてノイローゼが高じた天皇は740年から5年間に及ぶ彷徨の旅に出られます。

まず木津川のほとりに恭仁宮（くにのみや）の建設を始めます。今の加茂町の辺りです。かなりの造営が行われたのに今度は紫香楽宮の建設です。この紫香楽におられた743年に大仏建立の発願をされ、鑄造の施設なども準備されたようです。紫香楽遷都に反対する重臣たちが不審火を起こすなどして天皇を脅かしましたので、今度は難波宮へと逃避されます。そして重臣たちの不満をやっと聞き入れて平城京に戻られることになります。

さて、天皇はどうして大仏を建てようと考えられたのかと言いますと、天皇がかつて難波に行幸されたとき、知識寺というのをご覧になりました。知識というのは同志とか仲間とかいう意味でして、知識寺というのは同志の寄進によって出来たお寺ということになります。その知識寺には塑像の大仏がありました。天皇は予てから知識寺のように大勢の人々の寄進によって大仏殿を造りたいと考えておられたようです。また、大仏建立発願の詔でこんなことを述べておられます。「国中の銅を集めて仏像を造って、広く朕の知識を集めて、ともに利益を受け菩提を招致したい。国中の富は全て朕のものであるから、これをもって大仏を造ることはたやすいが、無理矢理に寄進をさせることは仏の御心に反することである。だから知識に加わろうとする者は、毎日盧舎那仏を心に念じて、自分が大仏を造るのだという気持ちになってほしい。国司や郡司はこのことを口実に百姓を徴発したり、増税したりしてはならない」。寄進者がみんな一緒に利益を受けるんだと言っておられます。そして国中の富は自分のものであるが、寄進を強制してはならないという配慮もしておられまして、なかなかノイローゼとは思えない立派な詔ではないでしょうか。

③ 金900両の献上

大仏建立の発願は紫香楽でしたが、実際の建設は745年から奈良において始められました。工事は順調に進められまして鑄造は749年に完成に近付くのですが、仕上げに使う金が足りません。そんな時に宇佐八幡宮の巫女たちがやってきて、金は大丈夫だとか何とか唱えて大仏の前で踊り狂ったそうです。そして実際、陸奥守の百濟王敬福から金900両が献上されました。ちょっと出来すぎたお話しですが、この大仏建立の指導者だった仏師国中公麻呂という百濟亡命者の子孫が、百濟王敬福と仕組んだのではないかと考えられます。

ともかくこの金献上によって取りあえず金鍍金の工事に入ることが出来、天皇はたいへん喜ばれて敬福を7階級特進させられ宮内卿河内守に榮転させられます。百濟王一族の根拠地は天智天皇か

ら与えられた難波にありましたが、このときから交野に土地を与えられて移転します。それが、百濟王神社のあります中宮の地であります。ここは元々交野郡の郡家だったのではないのでしょうか。百濟寺跡の発掘調査によって、百濟寺の前に何らかの建物があつたことが確認されていますし、禁野本町での調査でも街の遺稿が確認されているようですから、百濟王敬福は未開発の原野を与えられたのではなくて、既にかなり開発の進んでいた土地に新しい支配者としてやってきたようです。そして、そこを更に開発整備し、氏寺として百濟寺の建立も行いました。

この百濟寺を敬福が建てたかと言いますと、ちょっと疑問符が付くようです。出土した瓦の製作年代から見て、百濟寺は奈良時代の末期、即ち780年頃に建てられたことが推定されています。敬福は766年6月に死んでいますから、建設はそれ以後ということになります。敬福が発願した可能性は否定できませんが、出来上がったときには亡くなっていたということになります。

敬福は河内守に榮進した後も、常陸守、出雲守、伊予守、南海節度使、讃岐守、外衛大将、などを歴任しています。その時々的重要地点に送られた感じがします。百濟王の軍事力を買ってのものと考えられます。聖武天皇から桓武天皇の時代に掛けては東北で蝦夷の問題が大きくなっており、渤海や新羅への対策もあります。また、皇位継承問題もごたごたが続き朝廷の周辺はあわただしくなります。その朝廷にとって百濟王の軍事力は、必要不可欠なものであつたのではないのでしょうか。

(2) 大仏建立と百濟人

最後に、大仏建立に関与した百濟人のことをお話して終わりたいと思います。

先にちょっと触れましたように、大仏様の仏師は百濟からの亡命者であつた国骨富の孫の国公麻呂でした。国骨富は百濟の大臣級の家柄の人ですから亡命者の中でも中心的な人物です。その孫の公麻呂も教養ある文化人だつたでしょう。仏様を造る時に一番大事なのは顔のデザインですね。顔に気品がなければ仏様にならないわけですし、その形を設計する美術家というのが仏師です。今のお姿は再建されたものですから、創建当初は同じようなお顔であつたかどうかは分かりませんが、天皇は満足して開眼供養をされたようですから、立派なものであつたに違いありません。

大仏殿の建物を造つた大工の棟梁は猪名部百世といつて、これも百濟からの渡来人の子孫です。更に言うならば、知識によって大仏を建てるといふ天皇の意を戴して勸進に奔走した僧行基もまた、百濟から渡来した西文氏(かわちのあやし)の末裔であります。行基はこの知識勸進の功績によって大僧正の位を贈られ、死後は菩薩に祭り上げられました。聖武天皇が如何に行基の功績を高く評価されたかが分ります。

このようにして、百濟人たちが大仏殿建立の主要な業務に当たり、そしてその役割を立派にやり遂げました。百濟の人無くして奈良の大仏は無かつたと言っても過言ではありません。

私たちは、王仁博士が論語と千字文を伝えたといふ事だけが百濟からの文化であるといふのではなくて、日本文化のルーツの多くが百濟とか半島にあるといふことをもっとしっかりと認識する必要があると思ひます。

百濟寺跡は現在も発掘調査が行われています。今回の発掘によって寺の敷地内に鑄造工房があつたことが確認されました。鑄造技術者がここで働いていたのです。大仏を完成させた人たちがここにやって来て働いていたのではないかと想像したりしています。これからの調査が楽しみです。

発掘調査の写真などを市役所別館前のテントで展示しておりますのでご覧になってください。どうもありがとうございました。